

5000 年前から人が住み続けるまち 金剛坂 (解説シート 1)

金剛坂は新しい家や店舗が建ち並び、住みやすいまちとなっていますが、いったいいつごろから人が住んでいるのでしょうか。

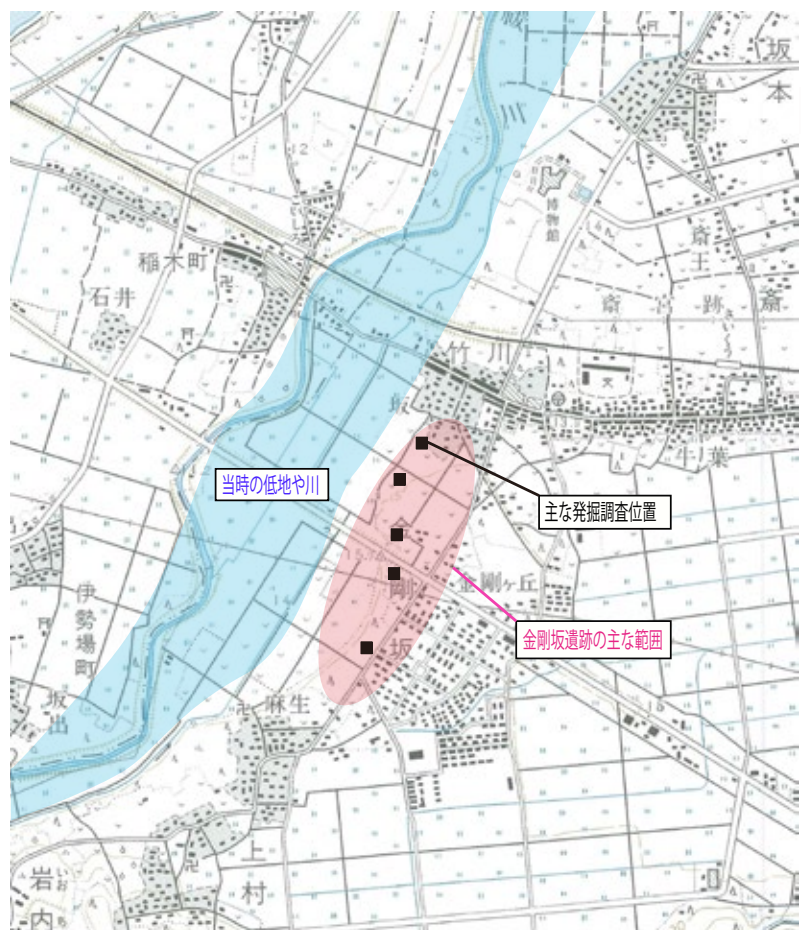
実は金剛坂の一帯は、そのまま金剛坂遺跡という範囲に含まれており、昭和44年から現在まで発掘調査が行われています(累計調査面積約18000㎡)。これまでの発掘調査成果によると、最も古い人の痕跡は約5000年前の縄文時代にあることがわかっており、そこから現在にいたるまで、連続して人が住み続けているということがわかってきました。では、なぜ金剛坂は人が住み続ける場所なのでしょう。

その大きな理由のひとつは高台にあることがあげられます。近年は自然災害が多く発生しており、住む環境に注意が払われるようになってきました。昔の人は現在よりも自然災害に影響を受けやすい生活だったのでそうした地形に敏感で高台を選んで住み、安住の地としていたようです。今回は、発掘調査の結果を踏まえて、私たちの祖先はどのような暮らしをしていたのか紹介します。

金剛坂遺跡で最も古い土器などが出土したのは遺跡の北西部分で、多くの縄文土器が出土しています。特に、かんじょうつぼがたどき環状壺形土器というドーナツに口が付いたような珍しい形の縄文土器が出土しており、現在は町の指定文化財となっています(平成8年指定有形文化財 考-1)。これは日常生活で使われたものではなく、儀式やお祭りなどで使われたのだと考えられます。当時は動物を狩ったり、山菜などを採ったりして暮らしていましたので、自然に対し



かんじょうつぼがたどき
環状壺形土器





弥生時代の金剛坂のムラは、写真の左にあるような深い濠で囲まれていました。

狩りなどをして、暮らしていた縄文時代と違って、稲作を始めた弥生時代には、田んぼの土地や水、収穫した米など、様々なものを守らなければならない時代だったようです。

て祈ることはとても重要で、この土器にもそういった想いが込められているのかもしれません。

次の弥生時代に入ると、高台のすぐ横の低地で米作りが始まったようです。金剛坂遺跡から出てくる弥生土器や石器は、米作りを行うのに適した形をしており、遠く九州から伝えられたものです。この場所は米作りに適していたために、伊勢地方でも最も古い段階で稲作が始められた場所だと考えられます。現在も金剛坂の高台から西を見ると田んぼが広がっていますが、米作りが始められた約2000年前の弥生時代も、これに似た風景だったのかもしれません。

また、金剛坂遺跡出土の弥生土器といえば、東京国立博物館に寄贈されたパレススタイルの壺があります。この壺はパレス（宮廷）で使われたもののように美しいことからこの名前が付けられています。明治ごろに金剛坂で出土し、珍しいということで寄贈されたようです。確かにこの壺は、今見ても美しいと思えるようなもので、壺の口や胴体の部分は赤く塗られており、普通の土器ではないことを物語っています。当時の人達はこの壺になにを入れたのでしょうか。

その後、奈良時代には斎宮寮がすぐ近くに置かれたことによって、それを支える集落となったようで、発掘調査では斎宮寮に関連するようなものも確認されています。さらに伊勢街道が整備されて以降は、はたで旅籠や茶屋などが繁盛したようです。

このように金剛坂は非常に暮らしやすい場所のため、5000年もの昔から人が住み続けてきました。

そして、これからも金剛坂周辺では人が暮らし続けることでしょう。日々の暮らしの中で、ふと自分たちの住んでいるところはどのような場所なのか考え、昔の人に思いを馳せてみるのもおもしろいと思います。



パレススタイルの壺（東京国立博物館所蔵）